

山の上の家

陳園（中国・交換留学生・浙江師範大学）

「おばちゃん、大丈夫ですよ。本当に大丈夫ですよ。このまま寝ても構わないですよ。暑くないから・・・もうこんな時間なのに～～」。私たちの声がまだ終わらないうちに、おじちゃんとおばちゃんは、氷を買いに出で行った。車の後ろ姿が消えていったその瞬間、目が涙で霞んできた。「こんなにやさしく、可愛らしいおじちゃんとおばちゃん、ほんとに私、幸せ・・・」。涙がぼろぼろこぼれてきた。

一泊のホームステイ体験。留学生の私ともう一人の女の子は、和歌山の最も普通の家庭に寄宿し、家族の一員として生活することになった。その夜のことである。

「あら、氷を準備していない、忘れてた。ちょっと待っててね、すぐ買いに行ってくるから。氷を袋に入れて、枕の上に乗せたら、気持ちいいよ。最近暑いのに、クーラーも付いてなくて、ごめんね」。そう言いながら、おじちゃんとおばちゃんは玄関に向かい、氷を買いに行ったのである。

「もう12時過ぎたよ。おじちゃんとおばちゃん、まだ帰って来ないね。大丈夫かな。曲がりくねった山道を走るのは大変だね。夜の山道、危ないなあ。大丈夫だよって言ったけど、やっぱり心配だよ」。私たち二人が、夜気持ちよく寝られるように、氷を買いに行ったおじちゃんとおばちゃんのことを思えば思うほど、なんともいえない不安な気持ちが強くなってきた。

と同時に、「あれ、何かが伝わってきたような気がする。一体なんだろう」、と思わず考え出してしまった。嬉しくて、暖かくて、雪解けの朝の陽射しのような感じであった。時間の流れを感じることも出来なくなった。自分の心をじっと見つめていた私。多分、仏像のような表情だったと思う。人間性を深く掘り下げていきたい衝動に駆られて、感激に浸っていた。

おじちゃんとおばちゃんが帰ってきたのは、もう深夜だった。氷の他、お菓子も買って来てくれた。その夜、おじちゃんとおばちゃんは何時頃寝たのかなあ、と思いながら、私たちはぐっすり眠った。

ホームステイをさせてもらったおじちゃんとおばちゃん夫婦の家は、山の上にある。そのことを最初に聞いた時、びっくりした。「えー、嘘。山の上、怖いよ。何で家を山の上に建てたんだよ」、と疑問を抱きながら、心細く出発した。でも、着いた途端に、目にした周りの風景に引き付けられた。道端の野生の花、小さくても生き生きと咲いている。花の名前は知らないが、生命力が強い花に違いない。家に入って、簡単な自己紹介をした。おじちゃんとおばちゃんの第一印象、穏やかで落ち着いた顔は忘れられない。

でも、今はもう、おじちゃんとおばちゃんは、私の心の中で、もはや取り除くことが出来ない小花のような存在で、強く生きている。

おじちゃんはカラオケが大好きで、家には歌を歌う設備が整っていた。誰にも予想できると思うが、おいしい料理を食べ終わった後、私たちは、おじちゃんと一緒に、ミニカラオケパーティーを行なった。でも、少し気になったので、おじちゃんに聞いてみた。「おじちゃん、こんな大声で、近所に迷惑をかけますね」。すると、おじちゃんは微笑みながら、「そんなことを心配する必要はないよ。山の上で、隣近所は少ないからね」、と優しく答えた。「そうですね、山の上で、自然に恵まれて、カラオケも気兼ねなく出来ますね」。私たちも笑い出した。

思う存分歌ってから、私たち二人は、居間の隣の部屋に入った。そこで、また感動する

光景が目映った。布団がすでに敷かれている。まるで、布団が私たちに、「もう綺麗に敷いたよ、寝る時間だよ」、と呼びかけているようだった。私は、なんとなく胸が詰まってきた、どうすればいいのかわからず、ぼうっとしていた。そう言えば、私たちが歌っている時、おばちゃんの姿が見えなかった。私達のために、食事の後片付けと布団敷きで忙しくしていたんだと考えるしかなかった。やっと分かった。私たちが知らないうちに、一人の日本女性は黙々と働いていた。自分のためではなく、他人のために力を尽くしていた。

翌日の朝、目が目覚めた時、夏の日差しが部屋いっぱいに入り込んでいて、朝ごはんを作っている音が、かすかに聞こえてきた。幸せな朝だ。「良く寝たか」。「はい、ぐっすり寝られました」。こんな対話の中で、また新しい一日が始まった。

ホームステイは、日本に来て、初めて体験した事である。胸を打たれた事は数多くある。純粋でつつましい生活を送っている日本人の家に泊まる事が出来て、私は、ラッキーな限りである。おじちゃん、おばちゃん、いろいろとありがとうございました。家族のように招待して頂いて、本当にありがとうございました。おじちゃん、おばちゃんの心の小さな花と私の心の、小さな花が、いつか、きっと一緒に花開くことを楽しみにしている。

